

木曾 檜

愛知県退職校長会 副会長 横井 隆

木曾檜は、木曾谷の産である。

広辞苑には、木曾谷とは、長野県の南西部、木曾川上流の溪谷一帯の総称。古来中山道が通じ、重要な交通路をなす。(中略)ヒノキその他の良材の産地とある。

木曾檜は、二十年ごとに行われる伊勢神宮の式年遷宮の神殿造営には欠かすことのできない用材として提供され続けてきた。その陰には、木曾檜を守り育てようとする人々の並々ならぬ努力があった。それはとりもなおさず自然の叡智を学ぶ姿であった。

戦後の復興のため多量の木材が必要とされたときも、伐採の対象とされた。木曾檜が群生する山のある部分を皆伐してその跡に植林をした。これは、至極当然の考え方であったが、三十センチに満たない苗を六十センチもの笹が覆って増殖し、せっかく植林した木曾檜を枯らしてしまった。「森の変化は荒廃だ」と王滝村・三浦(みづれ)実験林の人たちは学んだ。皆伐してその跡に植林すればよいという人間の浅い知恵は、自然には通用

しなかった。

森の再生は森から学ばねばならない。赤井龍男氏が木曾檜の様子を詳しく観察すると、切り株や倒木のあるところに再生が認められた。母樹が近くにあれば、種や苗を流さず森は自らの力で再生する。笹が三十センチ以下なら、檜は十五年後には、笹より背丈が高くなった。強い檜だけが生き残った。皆伐して植林するという人手による再生ではなく、天然更新を助ける程度の人手は必要だということを知った。

自然は、人間の時間や知恵では計り知れない奥深い叡智を秘めている。今日、「自然と人間の調和を」といい、発展途上国に配慮して京都議定書でも「持続可能な開発を」というが、そういうことが本当に可能であろうか。「自然の中の人間」であり、自然あつての人間であるという認識が必要ではないか。

森が人間にとって必要なのは、お金のためだけではない。いま、私たちは「お金には代えられない価値」を知ることである。

愛地球博は盛況裏に終わったが、人々の参加を得て、これからが本当のスタートであつてほしいと願っている。

第四十二回全連退総会に参加して

愛知県退職校長会 副会長 川本 文彦

平成十七年度全国連合退職校長会総会が、六月八日、東京のハリウッド美容専門学校ホールで開催された。愛知県から全連退理事・県会長の三林貞夫先生、県副会長の岩間敏和先生、横井隆先生と私の四名が出席した。

総会挨拶で土橋莊司全連退会長は、「相変わらず物は豊富であるが心は貧弱であり、学力低下と学校週五日制や総合学習の関連などが問われましよう。全連退の全員一人ひとりが全連退の綱領を生活の充実に役立て、教育尊重の風を高めるために「教育の日」の制定を全国的に働きかけたい。」と述べられた。

来賓挨拶で中山成彬文部科学大臣は、「子どもの学力低下傾向と努力不足を少子化社会とともに大変心配している。地方交付税の削減などで義務教育に地域格差が生じないように、教育予算の半額国庫負担制度の維持が大切と考えている。『子どもは国の宝』と考えて、ご支援いただきたい。」と話された。

議事では、十六年度の事業報告と決算報告、十七年度の目標・事業計画と予算・会則の一部改正・宣言が議決された。平成十七年度の役員承認では、県会長の三林貞夫先生が全連退の副会長に選出された。

全連退

「東海北陸地区協議会」愛知で開催

愛知県退職校長会 常任理事 内田 久幸

小春日和の十一月八日・九日の両日、土橋莊司全連退会長と臨席のもと、ルブラ王山において東陸愛知大会が開催されました。

東陸地区の会長兼任の三林貞夫会長の好采配により、組織の活性化・教育の日の制定状況等、各県の意欲的な取り組みが報告され、実のり多い充実した協議がなされた。

特筆すべきは、石川県が「いしかわ教育の日」を制定されたことである。十一月一日から二週間、県教委主催の記念式典を始め、退職校長会主催の「いしかわの教育あゆみ展」など、各市町村で多彩な催しを実施され、すばらしいスタートをきったとの報告であった。全国では、十二県において制定され、「教育週間」や「家庭の日」を設定している県は半数を越え、条例制定は増加すると思われる。

また、九二歳、豊饒（かくしゃく）とした土橋会長からは、日本の教育の危機との再会・生きる教育の重視を熱く語られると共に、組織体として活発な活動をと叱咤激励を受け閉会した。

二日目は、徳川美術館と徳川園において、尾張藩の勢いと名古屋の元気をオーバードアップされ、香り高い文化の一端を垣間見ただき、印象に残る半日研修を終え散会した。

生き生きライフ

水墨画を楽しむ

平成十五年度入会 鈴木 詔明

定年退職した年の秋、それまで描いていた大和絵風の水墨淡彩画に飽き足らず、中国水墨画を教授されるK先生の門をたたいた。

初めてその教室に臨んだ時の「作品を仕上げる積りにならず、遊び心で描きなさい。」「絵は字をかくように、字は絵をかくようにかきなさい。」という先生の言葉は、今でも忘れない。そうおっしゃりながら、私の眼前で、あらゆる花鳥、山水等を繊細且つ闊達に筆を運び、水墨画の本質である墨の濃淡、運筆・筆勢を分かり易く師範してくださる。今までもつばら教える側に居た者が、学ぶ側に転ずると、「眼前で描いて見せる（やってみせる）」ことの尊さ、重みを痛感する。筆に含ませる水加減や縦横無尽に将に全精神を筆の先に集中させる筆使いに、驚嘆しながら目を凝らす。

実は、このK先生、私より二十歳も若い。十八年前、中国より来日し、自らの創作活動と中国書画の教授をこの愛知で始められた。その若さで、心より敬服し、尊敬できる中国書画の創作意欲と指導力を発揮し続けてみえる。幼少の頃から血のにじむような辛苦を乗りこえて書画の道に精進されたのであろう。それをおくびにも出されず、楽しく学べとおっしゃるのである。

孔子が『論語』の中で「之れを知る者は、

之れを好む者に如かず。之れを好む者は、之れを楽しむに如かず。」ということばを思い起こす。学ぶことは、楽しむことが伴わなければ身につかないということである。と同時に、苦しみを味わわなければその楽しさは偽物になり下がる。この苦しきは、同じ絵を何枚書いても思うように描けない、同じ題材をいつまで描いているのか、創意ある構図が思い描けない等といった壁となつて立ちちはだかる。そうした苦痛も味わうが、努力・精進・我慢というイメージが、わくわくするといふ楽しさの中に埋没してしまう。まだ恐いもの知らずのレベルに自分が居るのかも知れない。

飲んだくれて帰宅しても、寢床に入る前に、筆を持ち、画仙紙の前に向かう習慣が身につけてきた。水墨画を学ぶ楽しさが、一年でも長く続くよう健康が与えられることを祈る。

あとがき

退職校長会『会報』第13号ができあがりましたので、お送りします。

今後の予定

- 一月十二日（木） 役員選考委員会
- 三月 二日（木） 正副会長・常任理事会
会計監査会
- 三月十六日（木） 総会

愛知県退職校長会事務局
名古屋市中区新栄一〇四九の一〇
愛知県教育会館六階
愛知県小中学校長会事務局内
電話番号〇五二二六一一八五二二